

令和 2 年 6 月 12 日現在

機関番号：32644

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K03129

研究課題名（和文）デンマーク領西インド諸島における自由黒人の果たした歴史的役割について

研究課題名（英文）The historical role of "Free Colored" on the Danish West Indies

研究代表者

佐保 吉一（Saho, Yoshikazu）

東海大学・文化社会学部・教授

研究者番号：00265109

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：デンマーク領西インド諸島では17世紀後半より、黒人奴隷によるサトウキビ栽培が始まり、奴隷制社会が築かれた。その中で、自由黒人（フリーブラック）は、他国植民地とは異なりフリーカラードと呼ばれる有色自由人に含まれることが明らかになった。フリーカラードは白人と黒人奴隷の中間に位置し特定地域に居住した。さらに一定の所有権も有する中、18世紀後半から人口が増加、当時の総督P.フォン・ショルテンは奴隷解放後の社会安定も考慮して政策立案を行い、1834年には法的に白人と平等の地位を与えた。結果的に1848年の奴隷解放及び解放後の社会、1878年の奴隷反乱においてもフリーカラードは一定の役割を果たしている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究ではデンマーク領西インド諸島におけるフリーカラードという階層の規模や役割を実証的に調査し、彼らが果たした歴史的役割を明らかにした。その上で彼らを現代の目から見た歴史の中に位置づけた。具体的にはデンマーク領西インド諸島におけるフリーカラードの定義と位置づけを行なったことにより、当時の他国植民地の奴隷制社会との比較が可能となった。それによってグローバルな観点からデンマーク領西インド、大きくはデンマークによる植民地支配を考察することが出来るようになった。また、本研究から得られた知見は、日本においては未だ発展途上の分野であるカリブ海域史を考えるうえでも示唆に富む。

研究成果の概要（英文）：Denmark eventually acquired three islands in the Caribbean region and they established sugar plantation in the late 17th century by using African slaves. And the society based on slavery was formed. Unlike other colonies, in the Danish West Indies 'free black' is included in the notion of Free Colored, who were non-white and non-slaves. The Free Colored were intermediate class and lived in special areas called Gutt. But they had some ownership rights over houses and slaves. The number of the Free Colored had increased rapidly in the late 19th century, and governor general P. von Scholten had issued the decrees in favor of them. The Free Colored in the Danish West Indies played a certain important role in the scene of the Emancipation (1848), and the Fireburn (1878). They also maintained the security of the towns and contributed on buffer position both for the whites and the black slaves. The historical role of them needs to be further examined through comparing with other colonies.

研究分野：西洋史学

キーワード：デンマーク領西インド諸島 セント・クロイ島 クリスチャンステッツ フリーカラード 自由黒人
フリーガット 奴隷法 ピーター・フォン・ショルテン

1. 研究開始当初の背景

日本における北欧史研究は最近ようやく活発になってきたとはいえ、依然発展途上の分野である。その為デンマークが有していた植民地に関しては殆ど研究が着手されていない状態である。しかし、この旧デンマーク領西インド諸島（現米領ヴァージン諸島）においては、まず 1792 年に奴隷貿易廃止が実質的に世界で初めて実施されたり、それに続く奴隷解放は、同時期の他のカリブ海諸国、例えば仏領マルティニーク島で見られた血なまぐさい解放とは異なり、殆ど無血に近い状態で実現した等特徴ある歴史を有している。奴隷解放に関しては以前の科研課題でその基本的内容（背景、経過、結果）を明らかにした。その研究過程で、自由黒人の存在を知るに至った。そしてその自由黒人にも大別して、白人との混血で自由を得たフリーカラード Free-Colored と自らの蓄財で自由を買い取ったフリーブラック Free-Black の 2 種類あることが判明した。デンマーク領では特にフリーカラードの規模が大きく、権利も広範である。例えば他の英領や仏領植民地と異なり、フリーカラードは家屋を所有したり、奴隷まで所有するなど、財産所有権が承認されていた。その彼らは 19 世紀になると次第に人口規模を増大させ、1835 年前後には全人口の約三分の一を占めるに至る。白人の数を凌駕して、社会における一大勢力となっていたため、約 70 年間に 35 余りの法律・規程が公布され、対フリーカラード政策も実施された。当時のデンマーク領西インド総督のピーター・フォン・ショルテン Peter von Scholten (1784-1854) は漸次的な奴隷解放を目指し、解放後の社会を見据えてフリーカラードを安定した中間層として育成しようとした。フォン・ショルテンは教育を重視し、1839 年には世界でも珍しい黒人奴隷子弟に対する義務教育を導入している。だが、デンマーク領ではフォン・ショルテンが予定していた以上に早く奴隷解放が実現し、解放後の混乱のなか自由黒人達は歴史の記述からは消えていった。本研究はその彼らの姿を様々な史料を用いて歴史の中に甦らせ、位置づけようとするものである。

2. 研究の目的

本研究の目的は 2017 年がデンマーク領離脱 100 周年というモメンタムを捉え、旧デンマーク領西インド諸島の歴史をこれまで看過されてきた自由黒人、特にフリーカラードを中心に据えて新たに歴史を捉え直すことである。具体的にはこれまで奴隷制に関して研究の空白地帯であったカリブ海デンマーク植民地を取り上げ、従来研究が手薄であった自由黒人、特に白人との混血である有色自由人フリーカラードの規模や役割を実証的に調べ、彼らが果たした歴史的役割を奴隷解放以前と解放後に分けて明らかにする。また、遺伝系図学や DNA 分析の最新研究成果の動向を追い、今後の文献を中心とする研究にどう生かすことが出来るかも検討する。さらに、2017 年というデンマーク領離脱・アメリカ領編入「100 周年」を契機に、旧植民地及び旧宗主国の側から自由黒人（フリーカラード）という特異な存在を捉え直し、彼らを中心に歴史を再構築したい。

3. 研究の方法

本研究は全体で 4 年間の実証的研究である。最大の特徴は、研究課題に関わる未刊行基本史料が米領ヴァージン諸島、デンマーク、アメリカの 3 カ所に分かれて存在するため、それらの場所を順次実際に訪問して史料を確認し、入手することである（ただ、2017 年度の米領ヴァージン諸島における現地調査は、2017 年 9 月に発生したハリケーン・マリアの甚大な被害により、史資料自体が影響を受けたため当初予定していたほどの調査・史料入手は達成できなかった）。また、奴隷貿易を活発に行っていた英国側から見た 18・19 世紀当時のデンマークに関する記述を調査するために、英国議会議事録 "British Parliamentary Papers, 'Slave Trade'"、Irish University Press, 1960 も関連史料として利用した。また近年急速に整備が進んだ個人情報データベースも批判的に利用して、個の部分からもフリーカラードの実態を調査することも視野に入れることを試みた。初年度（2016 年度）は文献目録作成、関連年表作成、文献入手等の基礎作業を中心に行ない、以後はそれを基に関連法規、訪問者の手記等の同時代史料を使用して、フリーカラードの実態を把握することに努めた。さらに最近整備されつつあるオンライン情報として入手可能なセンサスも用いて、最終的に中立的立場から、自由黒人（特にフリーカラード）の歴史的役割を明らかにする。特に（宗主国）デンマーク側からの研究はこれまでノスタルジックな視点を持ちがちであり、一方被支配者側は支配を受けたという被害者的な視点が多いため、どちらの側にも与しない客観的・中立的な立場で考察を行なうことに細心の注意を心がけた。

4. 研究成果

まず、入手できた史資料から旧デンマーク領西インド諸島におけるフリーカラードの定義と住居を始めその一般的特徴を考察した。その結果は次の通りである。

(1) フリーカラードについて

定義と人口規模：

デンマーク領西インド諸島の奴隷制社会は、人口的には白人、黒人（奴隷）、そして有色自由人から構成されていた。有色自由人とは「有色」な人、つまり「白人」ではない混血や黒人で、しかも奴隷身分から解放された「自由」な人である。そのなかにもフリーカラード Free Colored とフリーブラック Free Black の2種類あった。フリーカラードのカラード Colored とは、白人とアフリカ系黒人との混血を意味し、最初はヨーロッパ系白人とアフリカ系黒人奴隷女子から生まれる混血児を指した。フリーカラードはデンマークの公文書で使用される用語で、デンマーク語では Frie Farvede あるいは Frie Kulørte と表記される。最近では Freedman, Free Afro Caribbean または Free African Caribbean と呼ばれる。

またフリーブラックは、フリーネグロ Free Negro（デンマーク語では Frie Neger と表記）とも呼ばれ、自ら自由を買い戻したり、奴隷主から自由を付与された黒人のことを指す（婚姻関係を契機とする奴隷身分からの解放とは別である）。デンマーク領の奴隷制社会では奴隷の所有権も一部認められており、住居周辺の菜園で収穫した農作物を市場で売ることが容認されていた。その稼いだ金を地道に貯めたりして、奴隷主に購入価格の数倍の金額を支払って解放に至るが、その数は多くはなかった。また奴隷主から自由を与えられる場合は、長年の忠誠や奉仕に対してであり、臨終の間際や遺書によることが多かった。フリーカラードと比較するとその人数は圧倒的に少数であった。ゆえにデンマーク植民地社会において、フリーカラードは通常フリーブラックも含む、有色自由人という意味で使われた。フリーブラックは自由を獲得した後、職人、店員、漁業者等として生活を支えた。彼らは配偶者を選ぶ際、大抵は黒人奴隷を選んだが、中には白人により近づくため、白人または混血のフリーカラードを選ぶ者もいた。

18世紀末に急に増加したといわれるフリーカラードの人口についてみると、18世紀後半からその数が増加の一途を辿る。表1からは、1807-15年の英国占領時代を挟んで、1797年に全体で1,418人であったフリーカラードが1829年には約5倍の7,513人に急増していることが分かる。そしてその6年後にはさらに40%近く増加している。なお、1835年においてフリーカラードは全人口の4分の1を占めており、聖トーマス島ではフリーカラードの人口が黒人奴隷の数を上回っている。

表1 . デンマーク領西インド諸島におけるフリーカラード人口の推移(1789-1835)

年	聖トーマス島	聖ヤン島	聖クロイース島	合計(人)
1789	160	16	953	1,129
1797	239	15	1,164	1,418
1829	4,349	158	3,006	7,513
1835	5,024	202	4,913	10,319

< 出典：Boyer, William W.: America's Virgin Islands –A history of Human Rights and Wrongs-, Dyrham, North Carolina, (Carolina Academic Press), 2010, p.40. >

聖クロイース Skt.Croix 島では白人人口及び黒人人口が減少する中、フリーカラード人口は増加を続け、1835年の時点では同島人口の約5分の1を占めていた。聖クロイース島では東側にクリスチヤンステツ Christiansted という植民地政庁が位置する都市と、西側にはフレデリクステツ Frederiksted という街があり、そこにフリーカラードが主に居住していた。

フリーカラードの居住区

1747年の規則で定められて以来、フリーカラードは街の中心部からは少し離れた場所に居住した。それらの地区はフリーガットまたはウォータガット Water Gut と呼ばれ、特に聖クロイス島のクリスチャンステツズ Christiansted、フレデリクステツズ Frederiksted に設置された。ガットと呼ばれるように排水溝が現在でも近くにある場所である。クリスチャンステツズの場合を実際の地図で見ると（図1の斜線部分）、政庁や商店など政治経済的に重要な場所を取り囲むようにして、フリーカラードの居住区が位置している。地図では分かりにくい斜線部分は丘陵地帯の上方に位置している。ある意味で街を取り囲んでおり、一種の分離された緩衝地帯、穿った見方をすれば、黒人奴隷が暴動などで街に押し寄せる際の防波堤になっているのではないかとも思われる（フレデリクステツズにおけるフリーカラード居住区を地図上でみても、また実際の地形でも同様なことが指摘できる）。分離居住が行われているのである。フリーガットには主にフリーカラードが居住したが、後述するように白人あるいは黒人奴隷が居住する場合もあった。

< 図1. クリスチャンステツズのフリーカラード居住地区 >



（出典：St. Croix Map & Guide to Great Dining & Nightlife 2000 Edition, 斜線は筆者）

特定住居（18B East Street）に居住するフリーカラード

2018年3月に実施した現地調査の際、現在クリスチャンステツズのフリーガットがある、イースト通り18番B（図1参照）にスタジオを構えるラ・ヴァーン・ベレ La Vahn Belle 氏より、同番地の家屋の歴史に関する資料を入手した。それを一覧表にして主に以下のことが確認出来た。フリーガットには黒人奴隷（おそらく家内奴隷）も居住していること、所有者は通常フリーカラードであるが、白人もいること、居住者は常に複数おり、女性が主である。多いときには3世帯12人が居住していたこと、所有権が、母 息子 父 娘と移る場合があること、白人の奴隷所有者（男子）が黒人奴隷女子と関係して出生した子供に住居を遺贈したこと。

特定住居における所有者・居住者の変遷について、今回は偶然に情報を得ることになったため一例だけしか考察できなかったが、今後は同様のデータを数多く収集し、共通する傾向を見いだす必要がある。また、同じ聖クロイス島にあり、フリーカラードが多く居住していたフレデリクステツズについても同様の特定住居における所有者・居住者の変遷に関する調査を実施して比較すれば、フリーカラードの実態がより詳細に解明できると思われる。

(2) フリーカラードの歴史的役割

イギリスによる第2次占領(1807-1815)直後、デンマーク領のフリーカラードは代表2名を宗主国のデンマークに送り、その地位向上を国王に直訴しようとした(1816年の請願事件)。またフリーカラードにとっての転機は1827年にフォン・ショルテン Peter von Scholten (1784-1854)が総督代理に就任したことであった。それ以降彼はフリーカラードに関する積極的な政策を開始する。1829年には近隣の英国領でフリーカラードが全ての特別な制限から解放されるといふ措置が出たことに影響を受け、さらにフリーカラードの不满や個人の信念から、フォン・ショルテンはフリーカラードの法的自由を確立させるための改革を立案していく。行政府の考えはまず、フリーカラード達が援助を受けることなく自立できるように安定した職を得ることにあった。国王とフォン・ショルテンの間で数年間の交渉の結果、出されたのが1834年4月18日勅令(Fr. Ang. Nærmere Bestemmelse af de Frifarvedes borgerige Stilling paa de danske vestindiske Oer)である。本勅令により全てのフリーカラードに対して法的には白人と同じ権利と特権が与えられ(第1条)、両者はようやく平等になったのである。但し、本法令公布後に自由身分となる者(例えば海外からの自由身分移住者)に関しては、完全なる自由を獲得するまで3年間の待機期間が必要とされた(第2条)。この法令公布の意義はこれまで曖昧であった自由黒人の法律的な立場が白人と平等であると明確に謳われたことであった。本法律施行以後、公的記録からフリーカラードという言葉は消え去った。残ったのは自由民 fri と不自由民 ufri という分類であった(奴隷という呼称は用いられない)。このような白人と平等になったフリーカラードを、白人社会が受け入れるかは、また別の問題であった。そこで総督フォン・ショルテンは両者の融和を図ることに意を尽くした。そしてデンマーク領西インドでは、1848年7月3日に奴隷解放が総督フォン・ショルテンによって宣言された。この奴隷解放の契機となった奴隷達の結集は偶発的なものではなく、計画的なものであった。そしてそれを主導した中の1人が、ブッド将軍 General Buddo だと言われている。彼は身分がフリーカラードであるがゆえ、プランテーション間を自由に移動することが可能であった。その立場を利用して事前に連絡・調整を行なったのである。結果的にフリーカラードは奴隷解放、特にそれが暴力的にではなく平和裏に実現したという状況において、大きな役割を果たしたといえる。

彼らが歴史的に果たした役割や意味については、今後さらなる実証研究が必要であるが、本研究からは次のことが指摘できる。まずフリーカラードは白人と黒人の中間に位置づけられ、状況に応じて現地の白人が恩恵を得るような役割を担われたことである。例えば警備隊・消防隊による治安維持である。さらに居住地区が白人居住区を囲むように限定されたことで、緩衝地帯が形成され、暴動のような有事の際には黒人奴隷に対する防波堤の役割も担っていた。その彼らは1816年の請願事件では予想外の主体性のある種の存在感を示していることが注目に値する。そして1848年の奴隷解放では、ブッド将軍のようにフリーカラードならではの役割を果たしている。さらにこれはあくまでも現時点における見通しであるが、奴隷解放後の秩序が乱れて混乱をきたした社会の中であって、職と住居を有する彼らの存在があつてこそ、社会の「大」混乱が回避されたともいえるのではないだろうか。

(3) 今後の展望と課題

本研究によりデンマーク領におけるフリーカラードの定義が確定したため、今後同時代の他国植民地と比較することにより、デンマーク領西インド諸島におけるフリーカラードの特徴がより明確に浮かび上がってくるものと期待される。

また、これまでの研究では空白部分であった奴隷解放後(1848-1917年)の自由黒人の状況を、現地新聞(St. Croix Avis 他)や訪問者の手記を中心に考察を続けているが、残念ながら現時点では、特に解放直後に関して、元フリーカラードと元黒人奴隷の一般的境遇の差については明らかにはなっていない。裁判記録等を見る必要があるが、2017年秋のハリケーン被害のため資料の閲覧が不可能な状況が現在も続いている。今後の優先課題としたい。

さらに、本研究を進める中で、多くの資料が第2次英国占領時代(1807-15)にフリーカラード人口が増加したことを指摘していたが、この時代に関する研究は極めて少なく、判明している事実も断片的である。今後のこの時代に関する研究を進めることも視野に入れたい。

なお、本研究の期間中に遺伝系図学の研究成果やDNA分析の成果を利用したり、Ancestry.comの情報をを用いて、フリーカラードが辿った歴史を再構築しようと試みたが、それらの成果や情報が余りにも個人的・個別的なため、全体としての見通しを得るには時間と費用的な限界が現時点ではあることが明らかになった。

今後もカリブ海における旧デンマーク領西インド(植民地)の研究を続けることで、カリブ海域、(大西洋)奴隷貿易、奴隷制への学問的関心を喚起していきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 佐保吉一	4. 巻 23
2. 論文標題 旧デンマーク領西インド諸島におけるフリーカラード Free Colored に関する一考察 - 聖クロイース St. Croix 島を中心に (1733-1848) -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 IDUN (大阪大学)	6. 最初と最後の頁 281-296
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18910/71788	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐保吉一	4. 巻 該当無し
2. 論文標題 デンマークの西インド諸島 - 黒人奴隷制度史とカリブ海 -	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 『海のリテラシー - 北大西洋海域の「海民」の世界史 - 』	6. 最初と最後の頁 275 - 299
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 佐保吉一
2. 発表標題 デンマーク領西インド諸島におけるフリーカラード
3. 学会等名 海の研究会 (関西学院大学文学部田中きく代教授主催の研究会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 北欧文化協会、バルト・スカンディナヴィア研究会、北欧建築・デザイン協会	4. 発行年 2017年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 650 (分担頁 206-207)
3. 書名 北欧文化事典 (分担執筆: デンマーク海外領土の歴史)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----